



一般社団法人  
うるわしの桜井をつくる会  
〒633-0091 奈良県桜井市  
桜井1259エルトさくらい内  
TEL&FAX:0744-43-7773  
URL: http://lets.some.jp  
E-mail: lets@some.jp

# うるわし通信

令和3年3月

## 地球の気候変動は『非常事態宣言！』

2月10日芝EMクラブと当会の共催で谷口たかひさ講演会を、桜井市まほろばセンターでおこない、計100余名の参加がありました。

テーマは「みんなが知れば必ず変わる」で、現在進行する地球規模の気候変動と、それに対してどのように今、私たちが行動して行けば良いのか。世界各地での異常気象の現状(干ばつ・大規模火災・巨大台風・豪雨・南極や北極での氷解等々)、そしてそれに伴う被害状況の紹介をさまざまな映像やデーターをスクリーンに示しながら説明がされました。

この現状は、あいつぐ大型台風の発生や豪雨被害が全国各地で発生し、昨秋はウンカの大量発生などでも私達の身近なものとして出現しています。地球温暖化は、南極で18・2℃を観測し、北極圏で38℃に達するなど、科学者の予想をはるかに超えるスピードとなっています。外国では、若者たちが将来の自分たちへの現実を何とか良くしようとして、さまざまな行動を大規模に起こしていることが紹介され、その象徴としてスエーデン生まれのグレダ・ツーンベリさんの活動があります。

講演会に参加した人たちは、市内外からの参加者も多くおられ、これまでの本会の催しで見られる状況とは違った雰囲気でも、さまざまな感想や質疑が述べられました。左の新聞記事は、今年1月19日朝日新聞に掲載された谷口氏の紹介記事です。尚、谷口さんの講演と共に、現在注目されている図書を紹介します。『人新世(ひとしんせい)の「資本論」』(斎藤幸平著 集英社新書)

(楠木)

### ひと

10カ月で445回の講演をした環境活動家

R3.1.19 朝日

たかひさ 谷口 貴久 さん(32) 2021・1・19



以前の肩書は「ドイツ在住の実業家」だった。今は「ホームレス環境活動家です」と笑う。一昨年9月から講演を始め、ひたすら全国を回る。外国にいた期間を除く10カ月で445カ所を回った。話す内容は気候変動だ。自然が壊れるだけではない、と説く。引き起こすのは地球規模での土地、食料の奪い合いであり、「気候変

動で真っ先に失われるのは自然ではなく平和」と熱っぽく。大阪府出身。関西大でIT、英・マンチェスター大で英国史を学んだ。ドイツで貿易会社を営んでいたとき、地元の子供たちが学校を休んで環境デモをした。発起人だった14歳の女子中学生に話を聞くと、「気候変動を政府に止めてもらおうと思ったが、やってくれない。だから自分で止めようと思った」。勉強する中で彼女は問題の深刻さを知る。「私たちに将来がない。なのに大人は口だけ。行動する大人を一人も見ることがない」と言った。「言われたとき、ごっつい悔しくて、悲しくて……。こういう子が『あなたは違うね、行動してくれる大人ね』と言ってくれる大人になりたいかったです」

ドイツで街頭に立ち、やがて日本を講演して回り始めた。昨年3月にドイツの家を処分し、今は旅から旅へのホテル暮らし。「疲れますよ。講演しているときはいいですが、電車やバスでの移動がきついです」

文・写真 依光隆明

## コロナ禍でのボランティア活動の悩み

私達朝倉台での地域ボランティアは、子育て支援・高齢者支援・地域活性化活動として、わんぱくキッズ、サロン活動、体操教室、手作り横丁等々を行っている。

しかし、昨年からのコロナ禍により、休止・人数制限・回数制限等をしながらの実施となり、地域行事は殆ど中止せざるを得ない状況となっている。どこの地域も同じだと思う。

この1年の間、地域での人の交流や活動が中止される中、危惧している事が2点有る。

その1つは、高齢の方々の身体能力の衰え・気力低下・寝たきり状態になられていないか？

もう1つは、私達高齢ボランティア自身、今後活動を続けていける体力が残っているかどうか？

特に、高齢者の方々（私達も含め）の外出機会の減少、人との交流減少が体力維持・認知機能に取り返しのつかないダメージを与えていると感じている。足で歩く、人と会話・会食する、買い物、病院通い、どの行動も毎日の生活の中で自然に出来ていた事である。

これらの行動が殆ど無くなった事により、足腰の衰え、認知機能の低下、意欲・気分の低下等、自身を例にとっても甚だ心許ない状態である。その中で、体力・記憶力の低下が特にひどい。また、気がかりなこととして、メディア（テレビ・新聞等）の横文字・カタカナ語・和製英語の氾濫は酷い。テレビ・新聞等見るのは中年以降の人間である。（若者は殆ど見ない）

一瞬、言葉の意味が理解出来ない事が度々ある。“ステイホーム”でテレビ観賞の機会が多くなったが、単語が解らない為、苛付く事がしばしばである。何時から日本語が英語に取って代わられたのか？政治家もコメンテーターも解る日本語で話して欲しい。特に高齢者は巷の言葉について行けないので有る。年寄りはずいつい暇だから考えてしまうのである。例えば

○コロナ後の日本はどうなっているのか？

○高齢者に今までの様な日常生活は戻って来るのか？

○体力・認知機能に衰えが生じていないのか？

○キャッシュレス時代が来るのか？

○AI時代になると機械音痴の高齢者の日常生活はどうなるのか？

○九百兆円もの国債発行で年金は減額されないのか？

○孫世代にそのつけが行かないのか？

余り考えると、食欲が衰えるので、“成る様になる”精神でボーっと生きる事にする。こんな状況下で、本来のボランティア活動はどうあるべきなのか、どうすれば良いのか、葛藤する毎日である。良き答えが有れば教えて頂きたい。

小野田 和子



わんぱくキッズ・ママ クリスマス会



## 第4回 卑弥呼の里芸術祭『映画会』開催

**3月13日(土) 14時より～(開場13時30分) 市立図書館にて  
先着100名 入場料は無料です。(赤い羽根共同募金助成事業)**

うるわしの桜井をつくる会も構成団体である“卑弥呼の里芸術祭実行委員会”では、「障害のある人もない人も ともに」をテーマに、芸術文化を通じた活動を行ってきています。

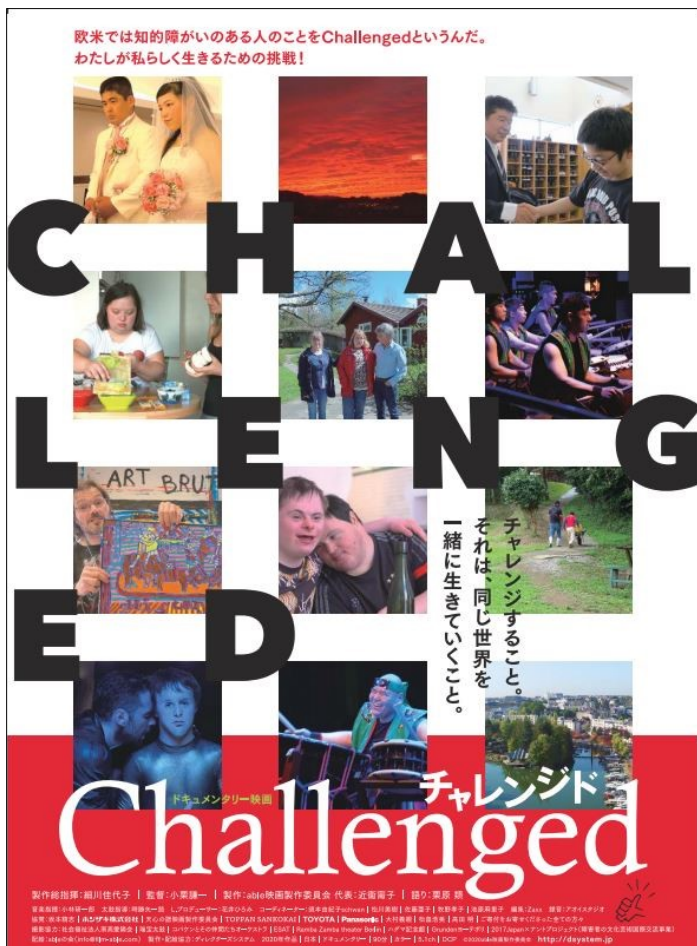
昨年は、市民会館ロビーで作品展とワークショップ等の取組みをおこない、多くの参加者がありましたが、本年はコロナウイルス拡大の下では、事業の見直しが必要となり、映画会の開催となりました。

この映画は、昨年全国の大都市を中心に映画館で上映されましたが、今回配給会社である“ableの会”と協議し、桜井での自主上映を行うことが出来るようになりました。

内容は、障害のある人たち(チャレンジド)が、自立の道を歩む姿を国内だけでなく海外(フランス・ドイツ・スウェーデン等)の取材を通して紹介されているドキュメンタリー映画です。

“ableの会”代表の細川佳代子さんは、次のようにこの映画を紹介しています。

長崎県雲仙市で知的障がいのある太鼓チーム「瑞宝太鼓」に出会ったのです。当初彼らはリハビリのために太鼓を叩き始めたそうですが、どんどん上達して、プロを目指して練習を積み、現在では年間100回以上の公演をこなし、地域のコミュニティーのサポートを得ながらプロの太鼓奏者として自立した生活を送っています。(中略) 今回の映画「challenged チャレンジド」は、チャレンジをすることを宿命として生きる人々という意味で、「障がいのある人」を表現する言葉としてアメリカで生まれたそうですが、私はこの言葉を耳にした時、障がいの有る人だけでなく全ての人間のことを表わす言葉だと思いました。・・・今回の映画に登場する人は、皆、勇気をもって人生にチャレンジする人たちばかりです」と。



この映画会は、コロナ対策の関係上事前予約制となっています。また、マスク着用をお願いしていますので、ご協力をお願いします。申込み連絡先は、実行委員会代表 楠木まで

【FAX 0744-43-5949 (氏名・連絡先・参加人数を記入)】

## 桜井 記紀万葉プロジェクト推進協議会の解散

「桜井 記紀万葉プロジェクト推進協議会」は、奈良県が推進する2012年から2020年までの「記紀万葉プロジェクト」事業に連携して、記紀万葉のふるさとである桜井を、県内はもとより全国各地に情報発信すること。併せて、市内の各種団体が協働して期間中に各種イベント・事業を実施し、桜井の地域振興に寄与することを目的とし、「桜井市、桜井市観光協会、うるわしの桜井をつくる会」が中心となって立ち上げました。

期間中、大和桜井100選の選定や、桜井記紀万葉歌碑原書展をあべのハルカス、万葉文化館、桜井市図書館での開催をはじめ、多くのイベントや事業に取り組んできました。

特にうるわしの桜井をつくる会は平成7年度から、桜井市観光ボランティアガイドの会の協力を得て、小学校6年生を対象に「地域歴史学習会」に取り組み、市内小学校周辺に残る貴重な文化遺産を自分たちの目で確認する校外学習会に取り組んできました。併せて、記紀万葉歌碑パネルを校内に展示し、学習のサポートを図るとともに中学校にも展示し、生徒たちの啓発を図ってきました。「同協議会」は、今年度末に解散しますが、新年度からも新しい体制で事業に取り組むことを桜井市に要望しています、皆様方のご協力よろしくお願いいたします。



【校内での歌碑パネル展示と地域歴史学習会の様子】

## 桜井図書館友の会

●3月の読書会は、NHK100分de名著 カール・マルクス『資本論』です。パンデミックや気候変動といった地球規模の環境危機をふまえ、いまこそ必要な社会変革に向けた実践の書として『資本論』をとらえ直す、まったく新しいマルクス論。

日 時：3月30日(火)15：30から

場 所：桜井市市民活動交流拠点会議室(エルト桜井2階内)



【編集後記】 新型コロナウイルスは、国内的には1都10府県に緊急事態宣言が発令され、近畿では2月末解除も言われている。しかし、この間の編集後記を見ると、全世界で昨年8月末に2500万人の感染者、85万人の死者、そして10月中旬には4000万人、110万人となり、間もなく1億2000万人の感染者が確認され、死者は250万人に迫っている。地球上での感染者拡大は爆発的に続いている。

人間による環境破壊、気候温暖化に伴う地球環境の劇的な変化、自然界と人間社会の予期しない接触の拡大が、経験のない感染症発生に繋がっているとの指摘もされている。

3密回避・営業自粛・ワクチン接種等が当面の対処法としても、何故このような事態が発生してくるのか、その背景をしっかりと考え、行動を起こしていくことが緊要となっている。

(編集子 K)

うるわし通信発行人  
高瀬 安男  
TEL:090-1678-9157